11月定例活動「里山体験会」

11月23日　天白土木事務所との共催による「里山体験会」が開催された。

前回までは8月の蒸し暑く蚊の攻撃を受けながらの、観察会であり不評であったので、土木事務所との協議の末、今回から紅葉が美しく活動しやすい11月に変更となった。前回と異なり、数ヶ月以上前から両者で打ち合わせを行い、森くらぶからの意見、要望を明確にし開催にこぎつけた。当日は好天に恵まれ申し込みキャンセルも少なく好評であった。　　（永田修二）

▲はじめに集いの広場で開会式を行う。準備体操で体をほぐした後、班別に紅(黄)葉真っ盛りの森を一回りした。

“午前の部：森を歩く”

小春日和の暖かな午前中。Ⅱ班の親子グループは集いの広場の西側からはじめた。

集いの広場から見て右側は神の領域。私たちが立っているところは生き物の領域です。つい手にしたくなる紅い葉にはくれぐれもご注意を。展望台に登れば雪を抱いたオンタケサンガ・・・。下を見れば全山紅葉、黄葉となんと素晴らしいことか・・・。このメカニズムの説明を・・・。

赤松ののぞき窓まで行く途中にある、朽ちかけたビートルアパートに寄りここで一言、この説明を聞いていた小六の女の子がそばに目を移して、ヤママユを見つけてくれた。「この繭をたくさん集めて染めて、織ってスカーフにしている方がいるのよ。この相生山にもたくさんぶら下がったらいいネ。そっとして置きましょう。」こちらの言葉に少々不満そうだったが、これも森の掟。

赤松の再生の場所で、マツの2才・3才の坊や探し。もちろん樹名札もみんなでつけた。この場所の樹名を区別する「科」が13程ある。

大急ぎで下山し、トンボ池の囲いでキチジョウソウの花が。今花が少ないときに咲くめでたい事と、色の鮮やかさを感じてもらう、又、池のトンボのヤゴにも目をやった。全員確認できたので、炭焼き小屋へダッシュ。間伐の竹を利用していることや、火入れまでのご苦労等聞いて、元の集合場所に戻った。

森の中へ入ったときの顔と、出てきたときの顔は笑みをたたえた穏やかな顔に変わっていたのは、竹や樹木の精？

（鈴木ひろ子）

◆　◆　◆

“午後の部①：柴刈り体験”

フィールドワークの部は、相生口に近い竹林での除伐作業で、最初に真弓さんから竹林の正しい管理についての説明を受けた後作業に入りました。

今回は除伐した後の枝払いや竹材の片付けも完璧に行ったため、竹林はまさに「名古屋の嵯峨野」？に変身しました。

また、切り出した竹は切りそろえて相生口近くに集め、希望者に自由に使ってもらえるようにしました。

（大舘　学）

◆　◆　◆

“午後の部②：森のクラフト”

クラフトの部は、集いの広場で作品のサンプルの紹介から開始。フィールドワークが竹伐リであることから、竹を素材としたクラフトとした。竹炭の黒とカラスウリの朱赤のコントラストが冴える壁飾り、かわいいクマの壁飾り、ゆらゆらゆれるカタツムリ、花入れ、水鉄砲などなど。

参加者には見本にこだわらず、自由に作成してもらう時間帯とした。慣れない手つきでノコギリと格闘するのは、子どもも大人も同じ。

終了時間には作品を２点・３点と手にして、にっこりする人もいた。

（近藤記巳子）

▲竹林での除伐作業。この後、鬱蒼とした竹林は「名古屋の嵯峨野」に。

森の住人たち　～ウグイス～

ウグイス　　ウグイス科
全長　　♂16ｃｍ　♀14ｃｍ
分布　　全国の低地から山地
餌　　クモなどの小昆虫など

「チャッチャッチャッ」木の茂みで鳥の声。

「この声は・・・」観察会の参加者の女性が問かけてくる。

「たぶん、よ～く知ってる鳥ですよ」と、まずは第1ヒント。スズメ、カラスなどおなじみの名がでるが、解答につながらない。

「でも、その鳥は今の鳴きかたとおそらく違うはず。これが第２ヒント」参加者同志、顔を見合わせるばかり・・・。

「春先にこの鳥の名前の和菓子が売り出されますよ」と、全く違う角度からの第３ヒント。

「あっ、ウグイス！ですか」　質問した彼女が目を大きく見開いて答える。

ウグイスといえば「ホーホケキョ」と鳴くもの。しかし、この鳴き方は繁殖期のいわゆるラブソングである。その季節以外は地鳴きあるいは笹鳴きといわれる「チャッチャッチャッ」と鳴く。頭～背中全体は灰色っぽい黄緑褐色ので、いわゆる和菓子の鶯餅の黄緑色ではない。

ウグイスの初鳴きは、人の心を暖かな春が巡ってきた喜びで満たす。「春告鳥」ともいわれるそのさえずりを、今年はいつ聞くことができるだろう。

（文責　　近藤　記巳子）